

思い出のグリーングラス

原曲は、Green Green Grass of Home という1960年代に米国で作られたカントリーソングである。その後、英国のトム・ジョーンズが歌って世界的に大ヒットし、日本でもよく知られている曲だ。

変わらない故郷の景色。汽車から降りるとママとパパが出迎えてくれる。金色の髪とサクランボの唇のメアリーが駆けてくる。みんなが会いに来てくれる。古い家は、ベンキがひび割れていてもしっかりと建っている。昔よく遊んだ古い樺の木もそのままある。愛しいメアリーと一緒に歩く道。故郷の家、緑の芝の心地よさ……。

2番までの詞である。故郷の家と心地よい緑の芝。懐かしい人々との思い出。郷愁を感じるいい曲だ。日本でも、日本語の詞をつけて何人かこの曲を歌っている。ただ、日本では歌われているのは2番までなのである。

あるコンサートでカントリーウエスタンのバンドが原曲のまま演奏したのを聴いて興味をもち、詞をじっくり読んでみた。そこで、この曲には3番があることを知った。

目が覚めてまわりを見ると冷たい灰色の壁。夢を見ていたのだ。看守と悲しげな老いた神父がいる。夜明けには腕を抱えられて連れていかれるのだ。そしていつか、故郷の樺の木蔭で緑の芝の下に横たわる。そのときはみんなが会いに来てくれるだろう。

この曲は、死刑囚が監獄の中で、死刑執行の日の朝に見た夢の歌だったのである。トム・ジョーンズのほかにも多くの歌手がこの曲を歌っているが、特に印象的でそして対象的な一人について紹介したい。

まずは、『存じエルビス・プレスリー。どんな歌手かの説明は不要だろう。独特の細かいビブラートをきかせた歌声である。3番の詞は、メロディをつけて歌うのではなく伴奏にのせて「語り」で聴かせてくれる。やはり、さすがプレスリー。故郷への哀愁を存分に感じさせてくれる。

次は、ジョニー・キャッシュ。カントリーウエスタンの大御所だ。長身にリーゼントの髪型と鋭い顔つき、「黒ずくめの男」の異名をとる全身黒の衣装。そして何よりもその声である。よくとおるドスのきいた低音は一度聴いたら忘れられない。彼は、刑務所を慰問して歌うことをライフワークにしていたとのことで、大勢の囚人たちの前でこの曲を歌つている音源が残っている。ギターを弾きながら3番までメロディをつけて、冷たい感じさえする淡々とした歌い方である。驚かされるのは聴衆である囚人たちが、この曲を聴いて拍手し歓声をあげていることだ。

最後に、疑問に思うこと。それは日本語版を2番までにしたのはなぜなのだろうかということだ。3番は日本語の詞にしにくかったのか。あまりにも暗くシリアスな内容になってしまふからなのか。

でも、日本の歌手が歌うこの曲を聴いていると、日本版「思い出のグリーングラス」は、2番までの故郷への郷愁の歌でよかつたのだろうなとも思う。